石川雅望『梅かえ物語』本文攷

Research on this composition of "Umegae-Monogatari" written by Ishikawa Masamoti, and its reprint

山本和明

はじめに

近世小説研究の先学麻生磯次に『古典との対話』（明治書院）という一冊がある。その中の「翻刻のむずかしさ」というエッセイで古典翻刻の難しさを説いている。

古典を翻刻する場合にも、いろいろなやり方がある。古典をそのまま一字一句違えずに翻刻するのは、校正さえ厳密にやれば、まずできないことはない。ところが西鶴の原本などの中には、全然、句読点をうってなかったり、清濁がまちまちであったりして、そのまま活字に直したのでは、今の人に読めそうもないものがある。そこで、原典をなるべくくずさず、しかも今の人にも意味がとりやすくするためには、相当の苦心を必要とする。（略）今の人にわかりやすくしようと思って、さかしらを加えるととんでもないことになってしまう。そうかといって元のままでは読みづらい。適当に仮名を漢字にかえ、清濁を明らかにする必要もあるだろう。しかしその

ために原意を誤ってはならないのである。

引用省略の箇所には『柳多留』を例に、読みやすくするために「誤字を訂正し、仮名づかいを改め」、かえって意味不明となった用例をあげる。翻刻とは何かという問題は、最近色々話題となるところであるが、常につきまとうのは、翻刻をすることで新たな異本が生じてしまう危険性についてである。一つの作品について多くの写本を眼にするとき、そこに文字レベルでの誤写、誤読といった例が必ずといって良いほどに存在する。研究者なら誰しも眼にするところであろう。人の手を介し「写す」という場合、どうしても避けられないことなのかも知れない。写本どころではない。版本と云えど、誤読の危険性から逃れることはできないのである。ならば逆に、言葉を訂し、漢字を宛て、濁点・句読点を加えて、自分なりの「解釈」を示すのだという姿勢も、積極的な読み方を示すものとも云える。問題なのは、それが「さかしら」として誤読を含んだ場合である。仮名を漢字に直すことなどは、今日流通している多くの古典文学作品もそうであり、読者への配慮という名の下に日常的になされているが、そこに「さかしら」はないのだろうか。

今回、紹介する版本『梅かえ物語』も管見の範囲で二度翻刻がなされている。一回目は、明治四三年一月刊『都の手ぶり考証』（大倉書店）の中に収録される。翻刻した関根正直は、「都の手ぶりは、以上の外にまだ一篇あるが、事柄が面白からぬから、省いて四篇だけに止めた。其の代りに、「梅が枝物語」を以て補ふ事にする。」と解説で記している。これがいち早い例だろう。序跋が省略されるものの、鼇頭・傍注は存在し、本文に適宜漢字を宛てている。

二回目は、面白会より大正六年二月二十五日発行された『みなおもしろ』第壹巻第十一号である。「梅ヶ枝物語」として全文が翻刻される。序跋を除き、適宜本文に漢字を宛てている点は関根翻刻に同じだが、傍注は除かれ、鼇頭の一部を抜粋し末尾に掲載されている。

双方とも挿絵や序文などが省かれたままであるが、本文は適宜漢字に直し、その「読み」を示してくれている。

しかし、『梅かえ物語』は、句読点はともかくとして、漢字を宛てるなどの「読み」を示してはいけないのではないか、それは「さかしら」なのではないか、というのが今回新たに翻刻を付す事由である。むしろ作者雅望の望んだのは、読みやすい文章にすることではない。詳細は別稿に譲るが、『梅かえ物語』の目指したものは、耕書堂広告（京大穎原文庫『梅かえ物語』掲載）にあるように、「伊勢・源氏等の古き詞をもて、物語ぶみのさまにかきなせる」「大和文初学びの階梯」として、古ぶりのかたちのままに、仮名は仮名として、出来るだけ呈示しなくては意味がないのだと考える。別稿において論じているため、これ以上は触れないが、本作に関して、それでもなお問題は尽きることはない。

本稿では、任意に漢字を宛てることを排した『梅かえ物語』本文の翻刻と、調査の過程で浮上してきた様々な問題のうち、構成と刊行に関して「問題」の所在を明らかとし、現時点での中間報告としたい。多く問題を残している、諒とせられたい。

本文構成について

『日本古典文学大辞典』「梅が枝物語」の項に「一巻一冊。読本。六樹園飯盛（石川雅望）作、蜂房秋鯉画。文化七年（一八一〇）江戸蔦屋重三郎刊。浄瑠璃『ひらがな盛衰記』四段目の一場面を擬古文に書き改めた小説。巻頭に永井不浅の仮名序、末尾に朝一通の漢文跋がある」と記されている。雅望撰『狂歌画像作者部類』によれば、永井不浅は「塩屋不浅」として、狂歌「恋風はおのが身にしむばかりにて枕のちりはふきも払はず」とともに人物像が描かれている。「不浅姓大江名方永井氏号塩屋武蔵野里ノ人」（六十五丁裏）とする。朝一通こと六一園も、同じく『狂歌画像作者部類』に掲載。狂歌名は文亭一通。「一通別号六一園朝比奈氏東都西郊ノ人」（六十九丁裏）とある。

問題は「巻頭に永井不浅の仮名序、末尾に朝一通の漢文跋がある」とする点である。粕谷宏紀氏の御論考（『石川雅望研究』角川書店）では、「序文は門人の文亭一通が漢文で記し、跋文は雅望自身および永井不浅が叙している」とされた。一体、どういう形があるべき姿なのだろうか。

関根正直は、『梅かえ物語』を「世間に少ない本で「都の手ぶり」よりは、却つて珍らしいとも云はれてゐる」（前掲書）とする。『国書総目録』『古典籍総合目録』によれば、国会・京大・東大国文等、十機関以上に所蔵が確認されており、今日のような状況からは珍しい本とは称しづらいのだが、多く写本で伝えられており、当時は意外に入手しづらかった可能性もある。例えば東北大狩野文庫本（「梅か枝物語」4-11789-1）は明治二七年洋々居主人校訂書入の写本、神宮文庫本（1564、国文学研究資料館蔵紙焼本による）はかなり正確に版本を写し、挿絵に彩色まで施している。

寓目したのは九点。そのうち狩野文庫本と神宮文庫本、国会図書館叢書料本（104-35-231）は写本のためひとまず除くとして、京大潁原文庫本（Pg-9）、国会図書館蔵本（224-105）、刈谷図書館村上文庫蔵本・東大国文蔵本・中村幸彦旧蔵本（上記三点は国文学研究資料館紙焼本による）、個人蔵本の六点は版本であった。以下、配列構成を中心に摘録する。

『都の手ぶり考証』にしても『みなおもしろ』にしても、鼇頭・傍注が存在する底本を利用していた（はずである）。今回の調査により、鼇頭・傍注の有無により二系統に分かれること。鼇頭・傍注のある本のなかで、序跋の配列・刊記の違いが存することが明らかとなった。

まず鼇頭・傍注のある系統本について。京大潁原文庫本と個人蔵本は、朝一通による漢文序、跋文は永井不浅が記し、巻末に「新鐫狂歌目録　耕書堂」（個人蔵本は一部欠）が附される。国会図書館蔵本は永井不浅の文で始まり、本文のあと朝一通の漢文が配されている。巻末に目録はなく、刊記「御江戸本町筋北ェ八町目通油町／書林　蔦屋重三

郎寿桜」とある。序跋の配列は京大穎原文庫本と逆である。東大国文蔵本も国会本に同様。但し、鹿都部真顔主宰の「四方側」に対し、「五側」を示す印「ㅁ」をあしらった模様が東大本裏表紙にはない。「ㅁ」印をあしらった模様は、管見に及んだこの系統の本の特徴となっている。また国会図書館蔵本は、表表紙中央に松葉色地の題簽が付されており、他本にない特色をもっている。

次に鼇頭・傍注のない系統について。刈谷図書館村上文庫蔵本と中村幸彦旧蔵本は、共に表紙に「ㅁ」模様があしらわれておらず、題簽も左上部に附されている。朝一通による漢文序に続き、本文となるのだが、挿絵は掲載されていない。丁付をみるに「四丁」から「六丁」に飛んでおり、挿絵該当の丁がないことになる。さらに永井不浅の文も奥付もない。この点、刈谷本、中村本ともに共通した特徴となっている。

他にも原本未見ながら、鈴木俊幸氏の紹介された中央大学附属図書館蔵本がある（『蔦重出版書目』青裳堂書店）。表紙無地。永井不浅の序、本文、朝一通の漢文跋と配し、後表紙見返にある奥付に「書肆　江戸通油町南側　蔦屋重三郎梓」と記載されているとのことである。

管見に及んだ中でのことであるが、鼇頭・傍注のある系統のなかでは、国会図書館蔵本が題簽の色地を考えてみても善本に属すると考えられる。それに従うなら、永井不浅序・朝一通跋という構成が原初形態ということになるのだが、ことはそれほどに単純に言い切れない。国会図書館蔵本の場合、後補表紙を元表紙の上に附し、綴じ直しがなされている。序跋相応箇所に丁付がなされておらず、刊年記載がなされていない場合、唯一年代を記した朝一通の文章を巻末に配するという錯簡の危険性も孕んでいるからである。

補助的な理解の術として、写本にて当時の状況を窺ってみる。例えば神宮文庫本にせよ、国会図書館叢書料本にせよ、その構成は、朝一通の漢文序・永井不浅の跋であった。その意味でもややこしい。今しばらく諸本の博捜を経て結論づける必要があろう。

なぜその構成にかくも拘るのか、訝しく思われるかも知れない。しかしそれは本書の刊行をめぐる問題とも絡んでいる。以下、そのことに触れ、改めて構成について考えてみたい。

刊行をめぐる仮説として

『梅かえ物語』が刊行されたのはいつなのだろうか。

『日本小説年表』『日本古典文学大辞典』は「文化七年（一八一〇）江戸蔦屋重三郎刊」としていた。しかし、それは朝一通の文中の記載「文化庚午正月」に依拠しているにすぎない。『割印帳』を元にした『享保以後江戸出版書目』では「梅かえ物語　全一冊／墨付十七丁／文化九年九月／六樹庵著／板元売出　蔦屋重三郎」と記され、文化九年刊となる。粕谷氏御著書によれば「本書は、文化八年刊雅望編、角丸屋甚助版『狂歌評判記』の広告に載せられている」（『狂歌評判記』山本未見）という。また、京大潁原文庫本等に掲載される「新鐫狂歌目録」は、文化八年正月新版のものから付載され始めたと鈴木俊幸氏は指摘する（先掲書三〇七頁）。文化八年頃より広告に掲載され、文化九年には刊行されたことだけは確かなようである。

しかしその一方で、『梅かえ物語』の永井不浅の文に注目してみたい。

ひとひ、六樹園のぬしがりゆきくるに、文机のもとにこのふみあり。これははやう旅路のかへさにたはぶれにかいつけたるを、此ころ蔦屋のあるじ、こひとりて「梅か枝物がたり」とかうぶらせておなじ園生のさくら木にゑりつけてひと巻の草子とはなしつとて、とり出てたびつ。手にとりて見るに、うるはしうもいまめかしうもあはれにもおかしくもおぼゆる。

この発言を信用するならば、永井不浅は、既に「蔦屋のあるじ」によって摺られた本を手にしていることになる。こ

のことは注目してよい。既に摺られた書物を手にしたと、該書の序跋に書かれている例は珍しいからである。通例として、序文や跋文で作者の稿本を手にしたことを記述した例は多く存在している。

六樹園のうし、旅より帰りつきてのち、いつまきのふみとり出て、これがきよがきしてよとて、おのれにたびつ。

（石川雅望『近江県物語』夙高亭高行跋）

頃日講余戯編一小説題曰梅枝話其趣頗模俗劇院本（略）書賈耕書堂閲以為奇貨可居先生不許曰此止閑房漫書豈足以観四方書賈固請不已先生終晒投之且顧予令序（略）文化庚午正月朝一通識于六一園

（石川雅望『梅かえ物語』六一園）

『梅かえ物語』に付された朝一通の漢文には、書肆耕書堂に請われた雅望は、やむを得ず稿本を投げ渡し、自分（朝一通）に「序」を書かせたとある。しかし、永井不浅の文章では、既に「おなじ園生のさくら木にゑりつけてひと巻の草子と」なされていたのである。そう仮定してみると、当初の形態は永井不浅の文章を除いた形とならなければいけない。

そこで浮上してくるのが、鼇頭・傍注のない系統の本の存在である。繰り返すが、この系統本は、版本ながら表紙模様なく、題簽も左上。朝一通の漢文序に続き本文があるが、鼇頭・傍注・挿絵は無い。かつ永井不浅の文章もなく奥付もない。ストレートに考えると、鼇頭・傍注を除いた後摺本と判断しても良さそうな代物である。

ただ『梅かえ物語』の場合、挿絵が二図連続し、一丁に収まる形で附されている点など気になる箇所もある。善本と目された国会図書館本を点検するに、挿絵の一丁が非常に美麗な摺りであるのに対し、本文の方は少し疲れた版面との印象をもつ。本文三丁裏の「ゑん」に「怨」と傍記されているが、そこに埋木をしたような痕跡も確認される。とすれば、当初何らかの理由で挿絵が出来るのが間に合わずに摺られた本が存在したと、「さかしら」を加えてみることも可能なのではなかろうか。それを永井不浅は手にして、文章を書き、挿絵共々加え、鼇頭・傍注を埋木して文

化九年に広く摺られた――これは「仮説」に過ぎない。しかし、だとすれば余計に序跋の配置が気になってくる。鼇頭・傍注のない系統二点は、朝一通による漢文序に続き、本文となっているのだから。

何をもって『梅かえ物語』とすれば良いのか。国会図書館蔵本のように題簽に松葉色の地のあるものを佳しとすべきか、刈谷図書館蔵本のように挿絵も奥付もない本を佳しとすべきか、諸本を博捜し、詳細に点検して今少し解決の糸口を探さなくては結論は出せそうもない。中間報告とした所以である。

如何なる結論となるにせよ、存命中の刊行である以上、鼇頭・傍注の付された本が、雅望の望んだ形であるとの立場は許容されるだろう。別稿の補助資料として呈示する意味も込め、以下、鼇頭・傍注の存する個人蔵本（大本一冊。縦二六・八糎×横十八・五糎。墨付十五丁）を底本として翻刻掲載しておこうと思う。

『梅かえ物語』翻刻

冒頭述べたように、版本を翻刻するときでも、どうしても誤読はつきまとうものである。また、どのような形であれ、本来の形を復元することは難しく、ならば、影印と翻刻を併せ掲載すべきとの意見もあろう。紙面の都合上、許される範囲で、本来的な形を残し、かつ読者へ読みやすい本文を提供できないか。これは矛盾する目標なのかもしれない。

今般の翻刻では、漢字を宛てることを意識的に排除した。濁点も附されているものには附し、そうでないものはそのままとした。句読点や「　」については、任意に附している。《　》は鼇頭箇所である。紙面の都合上、本来の如く頭注の形で表示せず、該当用語の後ろに付している。挿絵の位置については、【　】で示し、挿絵も呈示しておいた。この翻刻本文より、ある程度本来の姿には復元可能であると思う。なお巻末の広告は省略した。

『梅かえ物語』

牧竪善誦唐詩蠶婢成歌国風寒郷僻邑傚趣大都者有漸令然蓋此所以昇平二百年文運之闡未曾有盛於今日者也廼文人墨客彬々輩出著作日新撰述月張於是把其鉛槧而角技毫釐者亦不為不多果我師六樹園先生資質敏捷倔起其群彼有奇迹此有勝践皆取以文之筐笥之富不啼五車素寓目異邦書考文皇倭典是以片言隻句確乎其有拠也大非令諸家靡而無実徒競浮者比也頃日講余戯編一小説題曰梅枝話其趣頗模俗劇院本而属辞却整斎璃操甚婉曲機軸於心而織錦於彼鐫者爛在簡編書賈耕書堂閲以為奇貨可居先生不許曰此止閑房漫書豈足以観四方書賈固請不已先生終晒投之且顧予令序予不敢辞不敏贅一言其首爾於歟先生之於此書鳳毛豹文覧者設為尽其全體出未矣　文化庚午正月朝一通識于六一園〔印〕〔印〕

醉墨書〔印〕

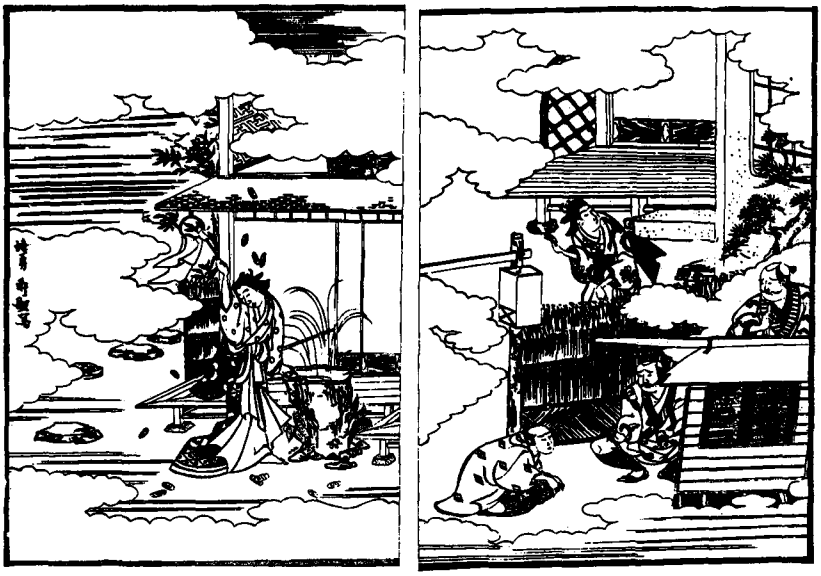
おしてるなにはのわたりは、よもの国々の舟つどふ所にて、あそび《あそび　和名抄遊女楊氏漢語抄云遊行女児和名宇加礼女又云阿曽比》とかなのりするもの、いとおほかなるなかに、神崎のさとなるちとせのなにかしが宿なんわきてにぎはゝしくひるよるをいはず、ゑひみだれてうちあげあそぶ人たえさりける。こよひとりわきてやごとなき人わたらせ給ふとて、家あるじうるはしうはかまきよそひ、まらうど（客）ゐ（内）のうち（外）とはきのごはす。女ばらは、あかねの布こ（植）しにひきゆひてたちはしるさま、いと〳〵すゞろぎたるけはひどもなり。まことやくれなゐの花こそ、そのふにうゝるとも、かくろへざるいろなれ。ふかうやつし給へれど、たれかはつねざまの人としも見奉らむ。とのかたに（外）人あまた声して、こしながらかきいる。「ひるよりまちつけまゐらせし」などつゐ（追）そう（従）して、中門の戸おしあけ、おくまりたるかたのおましに（御坐）いれたてまつる。「梅枝の君にとくつげてん。まづくだ物まゐらせよ。おほみきみさかなとく」

六一

など、声たかうの、しる。地火炉《地火炉　宇治拾遺、小右記、後三年記、続古事談などに見ゆ》のゆたぎらす音など、さながら松ふく風にかよひて、こゝろゆけるまうけのさまなり。庭にはきさらぎの梅の風まちがほなるを、吹こすにほひごとに、雪みぞれのいろにまがへるさへ、はえある夕暮の木のもとなり。梅かえの君といへるは、しよしの別当の北の方に宮づかへせし女房にありけるが、こゝろづからのしのびわさより、かしこをおひやらはれて、かうこゝにさすらへて、あそひめ（遊女）にみをかへてけるなり。げに此のひともとの（一樹）かほり（薫）いみじう、おなじつらなるもみなけおされて、ねたきことにおもへるみやま木《みやま木　源氏紅葉賀の巻に花のかたはらのみやま木なり》もおほかりけり。いつはりのなきよなりせば《古今恋四　いつはりのなきよなりせはいかはかり人のことのはうれしからまし》など、うちずし入くるさま、こよなうあいぎやうづきたり。あるじ「いかなるにか、おそくわたり給ひし。こよひのまらうどざねこそ、東国にてやごとなきくにのかみにはあなれ。けふのげんざんすぐして、やがてむかへとり給はんとて、おもとのたけばかりに、こがねつみならへて、とくよりまたせ給へり。はやわたり給ひねかし」と、はやりかにいふもにくし。「東国とのたまふ、そのまらうどのおもゝち、もしははたちばかりにて、ふくよかにひげかちに、いろくろき人にはおはさずや」と、へば、「いな、さるさまの人にはおはせず」といらふ。「さらばあかこゝろもおちゐぬ。されどしばしこゝにありて、物かたらふべき人あなれば、さるこゝろし給へ」といふに、「そのことよくしりて侍り。なにがしうけひき侍れば、かしこはわらはにゆづりつけて物せん。まちつけ給へらん人こそ、しのびをとこと名だかゝる源太の君におはすらめ」などいひつゝ、さうじおしあけて入ぬ。「あなかたは。心もしらぬ人のなかだちがほよ。さばれ、ぬしはいかにすかし給ひし。たそかれにわらたせ給ひねと、鹿嶋の里までせうそこ（消息）しつるに、まつち山《催馬楽　いて我駒はやくゆきませまつち山まつらん人をゆきてはや見ん》ともおもひやらせ給はずや。見たてまつらばとやせまし、かくやせまし」など思ひみだれつゝ、けふりぐさとうでゝくゆらすさま、「水ならぬ身は」《六帖　かれぬ身をもゆときくともいかにせんけちこそしらぬ水ならぬみて》ともいはまほしげなり。男はよがれせ

ずかゝづらふに、こよひも例のごとうちしのびてきたり。さうぞくよりはじめて、よろづきよらをぞつくせる。はをりづきんなどいへるものは、なほ〳〵しき物から、いまめきなつかしきは、人からなるべし。君はいとくしたるけはひして、たゝみざんとかいふことすなるを、われをまつにこそとまづこゝろをごりせられて入くれば、女「あさまの山はけふりたつとも」《六帖　いつとてか我恋さらんしなのなるあさまの山は煙たつとも》と、くちずさみつゝ、ほかげにうちそむけるを、「あなむづかし、かうきたんなるを。なでうこゝろゆかぬにか、くね〳〵しうもてなし給ふよ。こよひのまらうどの、后かねにさだまり給へるとこそきゝしか。さばれこよなうおもひあがり給へるよ。あさのころものかたのまよひは、とりみんともおぼさじかし。」《万葉巻七　ことしゆくにひさきもりかあさ衣肩のまよひはたれかとり見む》《和名抄　紕万与布繒欲壊也》とさかなげにいひて、かへらんとするを、せめておよびて、「けふのむしろに物することは、もとよりせうそこして聞えまゐらせつ。しらぬがほなるはいかにぞや。いまはたゞ春夏もなきこゝろざし《貫之集　さくらちり卯花もまた咲ぬれとこゝろさしには春夏もなし》を、かゝるみのなぐさめにはし侍るを、よの人のすきたわめたらんやうに、あた〳〵しきすぢにいひなし給ふは、なか〳〵あさきかたになん。いかにおもひたがへて、かうひが〳〵しきことをものべ、やらせ給ふ。契りそめしころほひより、こそことしとかぞふれば、うきをしのべるとし比のうれたさなど、おほろけのことには侍らず。聞えまゐらせんこともこゝら侍り。まづなだらかにやすらひ給ひてよ」と、涙をひとめうけて、怨ゑんじたるさま、あいぎやうふかし。さるはくだ〳〵しきことおほかれどかゝず。男も心をれて、「なゝげい給ひそ。もとよりの心ざしは、うたがふべきにあらず。まつ告まゐらすべきことあり。かまくらとのの御弟君、院のおほせごと蒙らせ給ひて、うてのつかひにいちの谷にいくさだちし給はんとす。わか父はらからも、御供にさふらふべきにて、われもともに供奉しまゐらすべきこと、かねておもひまうけしことなれば、こゝらのつはものゝなかにはひまぎれて、おもひ出せんこと、かゝる時すぐすべからず。さるはこよひとらの時とおきてられつれば、そこにあづけ置つるうぶきぬの鎧、とくたべ」といふ。女うちきくより、とみに

去年今年



【挿絵１】

【挿絵２】

いらへもせでうつぶしたれば、「さはわびしとやおもひ給ふ。されどひさしうとだえすべうもあらず。わがいときなき時、かまくら殿より、かしこき御名の文字をさへわかち給ひつれば、なほかくても御おぼえひとかたならず。それをほこらひをりて、父君のかうじ（勘事）をさへ、物ともせずなど、かしこにきこしめされんことをはじめ、人々のおもひいはんことも、かたはらいたくなん。こたび平家のつはものらにたちむかひて、たけ〳〵しくふればひて、剛なるつはもの、名をしとりなば、ふたゝび家にかへりすみて、いまのうきことを、むかしがたりにぞせまし。ゆくすゑなりいでんことをおもひ給はゞ、よろこぼひてこそ物し給ふべけれ」などこしらへかたらふに、猶うつふしふしていらへだにせず。さて涙かきやりて、「そのうぶぎぬのことのたまへるにつけて、こゝろ（心）ぎも（肝）、きゆるばかりになん」【挿絵1】【挿絵2】と、うちなく。「其よろひいかにしなしつる」ととへば、「いさよふ浪の」《万葉集三　もの、ふのやそ宇治川のあしろ木にいさよふ波のゆくへしらすも》といひもやらず、袖をかほにおしあて、ふしつ。男はたゞあきれにあきれ

て、「そはゆゑよしこそあらめ。いかにや〳〵」とせ貪むれば、「しかよなれ給はぬこそ、所せうおひたち給へるやごとなき人のならひなれ。かうじかうふらせ給ひてより、かくておはすことのせんすべなく、せめてはふれ奉らじのために、この神崎の君に身をかへ、とざまかうざまうしろみ奉りぬれど、かくあるはじめより、君をまらうどのさま客人にあつかひて侍れば、さるまうけに、こゝらのこがね、つひえつくのへるも、いかばかりとかおぼす。たとひ世にときめき、いきほひある人の子なりとも、たからといふ物は、つくるかぎりあり。まいておろかなる女の身にて、こがね花さく山はらうぜず。《万葉集十八　すへらきのみよさかえんとあつまなるみちのく山にこかね花さく》おきべなるしら玉《同九　いもかため我玉ひろふおきへなる白玉ぬてこおきつしらなみ》、いかでひろひえむ。御かうじだにゆりなばとおもひはかりて、なにがしのあるじにかたらひて、三百両のこがねのしろに、かの御鎧をなん、をぎの畦り置きつる」といふ。「さらばそのこがねなくは、うぶきぬはあがなひがたしや。こはいかにせまし」とむねつぶれて、しばし物もいはれざりしか、やゝためらひて、「そも此鎧は、かまくらどののたま物にて、よろづのたからにくらふべきにあらず。家にも命にも、かへがたき物なるを、くちをしうもうしなひつるよ。そよやいまはくゆともかひなし」とて、むねおしひろげ、かたなとりてしなんとするを、とくいだきとゞめて、「こはなぞ。うつしごゝろもなうおはするかな」とわなゝく。「いなこたびのいくさにおくれなば、いけるかひなし。うもれ木とくちはてんより、こゝろぎよく死なんこそまさらめ」と、しほたれつゝいふ。「かの御よろひあがなひえて奉りてん。なゝげき給ひそ。女の身にいかにすらんと、いぶかり給ひなん。こは御心にだにゆるさせ給はゞ、こよひのまらうどにそひぶしして、さまよくこしらへなしなば、さばかりのこがねは、やすくえ侍らん。さはいへど、としころちかひしみさを、いたづらになりなんこと、かへすゞ〳〵くちをしくこそ泣」とてかきくどきなく。「あはれの人のこゝろや。わが命たゆとも、さるこゝろざしわするべきかは」とても又なきぬ。「ゆめさることなのたまひそ。かのまらうどをこしらへんには、君のかくておはしまさば、心のおにゝ、おもひたがふることもや。とくかへらせ給ひね」とすゝむれば、「さかし。なが

六五

ゐせんなか〳〵にすさまじからむ。しばしすぐしてまゐこむ。よくこしらへ給ひてよ。かならずむねをいため給ひて、おひめもつくのはず、やまうを（疾）さへひきいだし給ふな」、ど、いふ〳〵かへりみがちにて出てゆくうしろで、見おくるさへ例ならぬ袖のつゆけさなり。「かならずこゝろいられして、いたうななやみ給ひそ。まことは、たばかりごとしてなど聞えしは、あがいつはりになん。あそのいたづらに身をなし給はん事のかなしく、しばしのどめんまでのそらごとにぞあなる。もとよりゆかりなきまらうど、いかでうとかる人に、さることやはすべき。さばれ、こよひのほどに、きせながもえがたく、君のゝぞみもかなはずは、死給はんことこそくちをしけれ。あはれいかにせまし」と、とざまかうざまにおもひめぐらして、はしちかうながめいりてをるに、ひとまなるかたに、声よくうたふをきけば、いとによるしらべもつきなからず。

とをあまり　むつてふとしに　たまつさを
手にとりすゑて　とをあまり　やつてふとしに
そのひとに　かへさひ申し　はたとせと
としをしふれと　したひもは　猶ときやらす
恋つゝそをる

とうたふめり。「こはなど、おもひみだるゝ人のこゝろをもしらで、おもふさまにもうたひなすかな。かのしやうがにいへらむやうに、あそになれまゐらせ、みたちをしぞきてのち（退）、かうあそびとさへはふれにたれど、さすがこと人にはしたひもをとかず。ひとひなりとも、むつましきめをと（女夫）ゝなりて、よにあらましなど、さるかたにのみ、うちたのみしをおぼしもかけず、こたびのいくさにほまれえて、かうじゆりなんとのみ、おもほしかけつる。あはれこよなきますらをだましひぞかし。とにかくに女といふものこそ、おもふくさはひ、たえざゝなるものなれ。あか君のため、かゝるすぢにたゆだふなど、いとふべうもあらねど、あり〳〵てなほすゑのよに、いかならんかなしかるめをや

みまし。それもかれもみなすくせなめり。とまれかくまれこがねこそほしけれ」と、なげがれてたてるに、かしこには又、いまめかしき声して、おうよりてはなやぎうたふ。

あかとしは　はたちになりぬ　しかはあれと
いのちのかきり　わかせこか　ゆひてし紐を
とかめやは　わかれし人は　ゆくみつの
かへらぬむかし　こひやしのはむ

うちそへぬる声もいとけちゑ(楊焉)んなり。女おもひうんじて、しのびよりてまらうどをころし、ふところなるものぬすみてんやとさへおもひおこしつれと、さるひがわさしいづとも、なか〳〵いたづらになりなは、なき親のあたもうたれじ。さもあれいかにせまし、このひのもとの国のほとけも神も、かくにはかなるねぎことはうけひき(承引)給はじよ。いでやつまこふ女の石となれるためしもぞある。身のいやしきはさることながら、こゝろおきてはたれにかはおとらん。身はいはほとも、なさばなしてむ」とて、ついたちて、すのこなる石のはちに、たゝへし水をむすびて、手あらひくちすゝぎて、人やしらんとうちひそみて、あなたなるかたにむかひて、しばしをがみいりて、ひさくとりあげたるさま、なにごとすらむ、ことさらびたり。「かねてよの人のいひつたふる、むけんのかねといふあり。その鐘をつく時は、とみこゝろのまゝなりときく。そはとほつあふみなるさやの中山といへる所のみてらにありとか。道はるかにへだゝりぬれど、わがかくひとすぢにおもひいりたるこゝろもて、このはちをかの鐘になずらへ、つきてしるしをみすべきなり。さもあらばあれ。これをむけんのかねとなし、おもふことかなはゞ、いけるかぎりは、ひるといふむしにせめられ、こんよはむけんに墮獄すともいとはじ。海川にすたれしこがねしろかね、たゞこゝもとにかいよせ給へ。なも観音ぼさちと、ひたひに手おしすり念じをり。かほいろもあからかに、紅梅のにほひそひ、髪もふとり、そらさまにたてるこゝちせられて、ひさくもてる手さへ、わなゝきふるふを、おもひねんじて、「いでうたん」とふりあぐ

るほど、たれにかあらん、たか楼どの、さうじ障子、ひとまばかりおしあけて、「こゝにこそ」といひさま、こゝらのこがね、なげいだすものか。はげしきみやまおろしに、やまぶきの花こきちらすごと、ちりぼひおつ。こは夢にや、さはうつゝにこそ。そもいづこの御仏にか、しらせ給はぬ人の、かくあまるばかりのいつくしみ給へる、こんよのすゑも、わすれ侍らじと、そゞろこゝろもうせて、かつはおそろしきこゝちすれど、こゝかしこさぐりもとめて、みひらいつひらひろひあつむうれしさいふべうもあらず。つゝみもつべき物もあらねば、《古今　よみ人しらす　うれしきをなにゝつゝまんから衣ふもとゆたかにたてといはましを》《新勅撰　よみ人しらす　うれしきを昔は袖につゝみけりこよひは身にもあまりぬるかは》袖ひきやりてつゝむにも、猶あまりあるよろこび。涙は、ともにつきせず。とく御鎧あがなひてんと、ひたひにさゝげて、いそぎさうときつゝ、はしりゆきけるとぞ。

さかみの国よりかへさに、かな川といへるうまや路にとまりたるに、物かたらふへき人しなければ、つれ〳〵とともしひかゝけをるもさう〳〵しうて、「よむへきふみあらはかしあたへてよ」とこひたるに、「かゝる物侍り」とてもてきぬ。こは耳なれにたれは、よむへうもおほえねは、さてうちおきつ。されと、うちもねられねは、筆とうて、かのうたひ物のさまを物かたりふみのやうにかきやりみたるなり。たゝふるさとに待つけゐたらん女子へのつとにもせまく、かつはたひちのこゝろやりにもとて、ちひたる筆して書つけたるになむ。

六樹園

ひとひ、六樹園のぬしかりゆきくるに、文机のもとにこのふみあり。これははやう旅路のかへさにたはふれにかいつけたるを、此ころ蔦屋のあるし、こひとりて「梅か枝物がたり」とかうふらせておなし園生のさくら木にゑりつけてひと巻の草子とはなしつとて、とり出てたひつ。手にとりて見るに、うるはしうもいまめかしうもあはれにもおかしくもおほゆる。なかに耳なれたるうたひものゝすちなれば、たれ〳〵にもめやすう、たと〳〵しきひかみゝにもいり

やすきこゝちそする。さるは今をむかしにとりなし、むかしをいまにうつしとり給へる筆つかひの、いかてかうねたきまで御こゝろのまゝにはか筆やり給へるよとあまたゝひうちかへしみるに、たゝ錦をはきひろけたるやうにおほえてさしおくことをだにうちわすれぬ。あはれ此梅か枝のかほり、世にたかうはいひろこり、いろをも香をもきゝしれらん人々にはもらすことなくしらせまほしうこそおほゆれ。けに彼よろひあかなふへきこかねえつらんひとのうれしさもかうこそなとひとりこちつゝ、此ひと巻のふえ袖におしつゝみていとままうしてかへりさりぬ

永井不浅しるす

六九